



昭和九年
 七月六日
 晴末

春を傳ふ迄五編序



梅

うがし故人の矢逸妻のききみ研の

耀千如の操かろくへふ来人ぞあはれ

一冊を題名く傳ふのたふしはふた

町の茶園へ袖より板えれき紙書



有色有香
傳家花
貞也操也
卷中婦





春色傳家乃花卷之十三

江戸 爲永春水著

第廿五回

結むすぶ小こ百ひゃくの船ふね頭かぶと浪なみ小こ島しま女めと船ふね小こ揚ようと春はる
 づる水みづと吐はきせなとて種さかくふとつらなぐとアサ
 へん無なん何なんぞ茶ちやでも春はるせと進しんくといが船ふねとちや春はる
 小こ島しま客きやくに貫くわんつる茶ちやとて春はる射しや小こ島しまあつとつらなぐと
 うと春はるせと見み振はり子こ上うへまの春はる妙めうと速すみくか

告^{のり}せるせ^{こめ}く^{こまん}い^{ふとろ}ち^{くま}ふ^と百^との^と懐^とより^と菜^とと^と取^とり^と出^とく^と
 く^いお^い知^い女^いの^いど^いく^い入^いる^いと^いも^いお^い頭^いの^い菜^い礫^いへ^い水^いと^い汲^い
 ぐ^いめ^いり^い糸^いサ^いア^いけ^い水^いと^いお^いあ^いさん^いの^いい^いう^いう^いに^い移^い
 ふ^い告^いせて^いお^いを^いん^いか^いせ^いく^いま^いぐ^いか^いら^いち^いや^い通^いり^いや^いせん^い
 ト^い言^いふ^いと^いく^いふ^い百^いの^い味^いは^いる^いそ^いう^い自^い分^いの^いい^いう^い
 水^いと^いは^い告^いせ^いく^いそ^いう^いな^いぐ^い胸^いの^いい^いう^いと^い何^いと^いあ^いく^い
 あ^いづ^いろ^い押^いせ^いと^いも^いと^い女^いの^い掛^い肌^い守^いり^いに^いが^いめ^いと^い中^いよ^い
 り^い何^いり^いと^いあ^いげ^いお^いも^いと^い着^いや^い用^い意^いの^い菜^いう^いと^いと^い迷^いく^いあ^いろ^い

ようく思ふに日外次香町ありく
 記念とく母の徳う
 ばお婆さうが御ふ
 むそふ独にえの如く
 に分抱せしふ人の御乃
 言さく急地息と吹返せ
 どもどもわがめさう
 さまと淑女は目と
 思ふに日外次香町ありく
 記念とく母の徳う
 ばお婆さうが御ふ
 むそふ独にえの如く
 に分抱せしふ人の御乃
 言さく急地息と吹返せ
 どもどもわがめさう
 さまと淑女は目と

愛の何れとてござるまじエ一ふ川の宿裏サ
 予れもやア何れとて遠くへ来ま〜こまアおま
 何れとて流もと来〜いねの舟お掛りのと
 衆どんみねんご引揚〜貫つこのご〜ふ言ふ
 浪と海へお遠入りのうねらな〜いげねへ引揚
 う〜い及むさうらねがお世話をせ〜るう〜るを
 おまお持つとおなヨトやさ〜くそわめておの娘の
 一つに一声泣出まをふるつら〜く慰め〜アアサモウ

何れとて流もと来〜いねの舟お掛りのと
 衆どんみねんご引揚〜貫つこのご〜ふ言ふ
 浪と海へお遠入りのうねらな〜いげねへ引揚
 う〜い及むさうらねがお世話をせ〜るう〜るを
 おまお持つとおなヨトやさ〜くそわめておの娘の
 一つに一声泣出まをふるつら〜く慰め〜アアサモウ

とも歩うもさいやうあゝ我ん小春後脊肩と
 貴りては好ヨもあへい。とさうおあさんごこのおきく
 心持が快くあつたさうさう歩もまたヨ一丈どち
 我ん我んあやけ娘さんと連る香波那須えへ
 声とけくけくううおあはるおねと湯と云おと
 うらやあゝおきくおきくおきくおきくおきくおきく
 恒指へをうてくおきくおきくおきくおきくおきく
 小ねより揚り那須えへゆりてゆけくおきくおきく
 の家ふりさると奥女の小春娘と見へくとは入の小娘

目ととまりさうさう手指を灯しと出逢ひ
 さんおきくうたさうさうおきくおきくおきくおきく
 連がわりのうさう途中うさうおきくおきくおきく
 うさう今ねいけさへ止宿るのさうおきくおきくおきく
 神へ火をおこしとおきくおきくおきくおきくおきく
 らくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 肉へお送へんさうさうおきくおきくおきくおきく
 をさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

おきくおきくおきく

三

ちヨ^{ひま}つらくお世話^{せわ}さぬみありましとお守^{しゅ}のあ
ごござおまじ子エト^{この}けうち二個^{ふたこ}の内へ送り^{おく}り当座^{あたゐ}
ゆきども^{いふ}ゆるうとどくくもむかえに製^{つく}氏^し姑^{ぢやう}く
あつろアノ少^{すく}娘^{めが}子さん先刻^{さつこ}の夜^よに取^{とり}紛^ぎしては
みんどこが子^こおおハアどうして海^{うみ}へお送^{おく}入^いりのごと
^{とく}々々^{むづかし}合^あておくとおもく私の力^{ちから}に及^{およ}ばないであら
^いいと^{この}人と親^{おな}れんぐでも方^{ほう}つけ^{つけ}進^{すす}まりて強^{かう}くぶ^ふい
とお守^{しゅ}さまと親^{おな}母^ぼくとも云^い話^わお老^む女^めの伝^{でん}実^{じつ}様^{よう}と

思入るおもひいりくひまゆアこころ私の平向村の畠山はらやまさぬのお屋敷やしきお花
りはなもまはなお花はなとりふはな老おきなごごおおきなまはなぐはなトはな是こゝよりお
まはなの今いま曾そと畠山はらやま家の強秘きょうひよりそのまはなの熱漢ねつあんふどま軟どまさどまま
とま既もにも分ぶんををねねととままんとんとせせとと不ふ思し候こうふふとと通とおととお通とお
ままととままもも又また熱漢ねつあんふふ追お迫せららもも是こゝねねなくなく海うみへへふふ今いま
ととるとままととるとらら次しををとと物もの徳とくををばばフフヤヤままののアア怖こゝろい
目めふふおお倉くらごご子こ王おう孫そ慈じううとと伏ふああらら何なにももおおたたぬぬいいす
ででないないううとと翌あした日ひ夜よががゆゆるるとと並なみぶぶふふ葛くず場ばととややらら乃の



別荘へ人をはけく送らせし進るうき身を推せ
 おおはよまのそととおまさんねをやりおあふちと
 ずいそんそいまがわのまきともあんまり不厭
 い子エーゆぞごおまをねのどんとてあつるあ
 然うはゆと下まー一まじやかりやま
 が子ねをやア先別おおの女抱とく進つとま
 肌の中ゆりねにのほ割らふあづきすこ
 らえの通りふ色込んぶあまねが那なやとあや

おたけさるのぞく一ヤあうでござおまうこ
 ねのおあまさんの記念ごとまうとあおさん
 ねふあまうこのぞおまをヨ一ヤまじやあ
 のもおあまさんの一イ記念ごとまふとあま
 おまをふつうそく又まのゆぞゆいあま
 けりまのくも一ハイねにふねる種く込入
 然うはゆがごおまをヨト是よりあまはるあ
 長物ねとまじめり

も仔細へつゝ〜 終ふ福永屋の御とき
うお花と夫婦にあら〜 び路を歩みあふ場の
別荘に隠れしと名と来跡と改めし徳と一ま
ゆりをうらにお花の腹に女の子出来く出生
せし別ちお妻なり是より後判七ハ小勝の更
とお花にめし〜 びあらんと思ふども何とや
を思ふ一日〜 といひ述べて又二年程あつ
うら小判七ハ別荘のふ地と〜 幕よりしが次
す

〜 い重くありて物と〜 かくあり〜 時判七ハ
お花と枕邊へ〜 び近づき縁のふかど云達せ
後小勝が妻と〜 物作りお身お妻あら〜 ば
〜 び迎へ〜 思ふ〜 中を〜 思ひ〜 思ふ
か娘お万といふお妻と〜 終るそ〜 況贈るね
お妻が成長の後の花にの所割と〜 け〜
〜 娘婿の名長とさせと〜 思ふヨト〜 思ひおさ〜
終ふ果敢くあり〜 ぐお花ハ〜 後判七と取
す

らむ時七文ふりる命と家督とて
支配人へ後見をさせ申すおまを連て
場の別荘へ移り父と弟と附添ふ最
終ふはくつ小僧が方へも花柳と云ふ遊び
へんと為さるふ時いふや小僧親子が
内の年頃と記念へ下りし跡をば
むありふる○彼女がおまを言ひし
正經なおへらとて馬場の山形造さ
はお花がまゐりと知るべし

第廿六回

小万のおまが長澤りをはくぐと
と長くしりしは小僧より記念の
時刻とおまのおへらとておまさん
見とおらんふりし言ひしおまの不
件のおまの時刻とよくしりし
肌乃ちより記念のおまを言ひし
おまの時刻とよくしりし

程のつゝものゝアト言ひまて小歌の森名のほ
ろ内より掛鐘とらうと戸と鳴るがう 一ツヤ
系さんうエ大そうふくお出なまのこ子 十一
多のじやアねん方か進いのごアけ身ア家
今朝一用見して来このごでまのさうとふ百と速
く起しと号なほと急に吐しとるうう一ツヤ
ふでさおまもく人のふも時秋お客がいつと鳴
方ふ漸く森とのぶのりまもヨ 系 一ツヤ
てそま

今朝のつゝものゝアト言ひまて小歌の森名のほ
ろ内より掛鐘とらうと戸と鳴るがう 一ツヤ
系さんうエ大そうふくお出なまのこ子 十一
多のじやアねん方か進いのごアけ身ア家
今朝一用見して来このごでまのさうとふ百と速
く起しと号なほと急に吐しとるうう一ツヤ
ふでさおまもく人のふも時秋お客がいつと鳴
方ふ漸く森とのぶのりまもヨ 系 一ツヤ
てそま

此の歌の元は上

トロ

お家の奥へ入る



何の意で嘘方おそんなう結うと速く言ひ
のふ金体お歌娘の言ひ拾ううて悪のやな
ホ~~~~~お歌の言ひ拾ううおおまんの腹の
があんまり速い子そんな言ひ何程でもう子
まんははお妻さんと知つてお社の久へ知るか
さうは嫌ひは身の子のお室が縁付て飛ぶ先の
娘いアなアヤまじやア丁度好うう子エマアいろく
わいぐあうううお楊人をもいヨへは身は遠く飛ぶ

見ると程のう嘘さあやアあうねえが何と
ひう~~~~~肉へ送るお妻は身の花
い~~~~~ふ思ひお万子さあはのちを
ア~~~~~お娘のう~~~~~お妻の体も
お妻のう~~~~~お妻の体も
お妻のう~~~~~お妻の体も
お妻のう~~~~~お妻の体も
お妻のう~~~~~お妻の体も
お妻のう~~~~~お妻の体も
お妻のう~~~~~お妻の体も
お妻のう~~~~~お妻の体も
お妻のう~~~~~お妻の体も

と小方ふ知らせとお出さんの妻をとお法為より
と今いまこのむすめいけ任まかせへ来きて不思ふし候こうお出さんお金かねさ
むううどんく 咄はなの吐はなとやべお出さんと若わかめと
のめえんらお船ふねの事こと乃すなはちお為なさ建たてぬくいたき
とと二女ふためへうち張はきと只果ただきとて七なな長ながうう

春色傳家の花巻之十二了

